

Economic Indicators

発表日: 2024 年 8 月 19 日(月)

機械受注統計調査(2024 年 6 月)

～4-6 月期は前期比小幅減。7-9 月期も冴えない～

第一生命経済研究所 経済調査部

副主任エコノミスト 大柴 千智 (Tel: 03-5221-4525)

(単位: %)

		民需 (船舶・電力除く)	製造業	非製造業 (船舶・電力除く)	代理店	官公需	外需
		前期比	前期比	前期比	前期比	前期比	前期比
23	1-3月	2.0	0.8	2.9	1.9	20.6	▲ 17.3
	4-6月	▲ 2.9	0.3	▲ 8.0	▲ 0.8	9.8	6.2
	7-9月	▲ 1.4	▲ 2.6	▲ 0.2	▲ 3.0	2.6	2.0
	10-12月	▲ 1.3	▲ 0.0	1.1	4.9	▲ 0.1	4.6
24	1-3月	4.4	0.9	6.8	3.2	55.1	▲ 4.7
	4-6月	▲ 0.1	2.8	▲ 3.7	▲ 7.3	▲ 33.6	21.7
	7-9月(見)	0.2	2.4	1.1	▲ 3.0	35.5	▲ 8.2
23	6月	2.1	0.5	8.8	15.3	▲ 1.8	▲ 4.4
	7月	▲ 1.3	▲ 3.5	0.7	▲ 4.7	1.1	0.8
	8月	▲ 0.2	0.4	▲ 2.1	7.9	▲ 19.4	▲ 4.2
	9月	1.2	▲ 0.4	4.2	▲ 16.9	48.6	13.4
	10月	▲ 0.1	0.7	▲ 0.1	16.3	▲ 31.2	▲ 4.2
	11月	▲ 3.7	▲ 3.9	▲ 0.1	▲ 2.7	29.5	1.4
	12月	1.9	6.0	▲ 2.3	4.8	3.7	3.1
	1月	▲ 1.7	▲ 13.2	6.5	0.7	24.4	▲ 4.4
	2月	7.7	9.4	9.1	▲ 2.1	12.1	0.7
	3月	2.9	19.4	▲ 11.3	5.2	12.0	▲ 9.4
	4月	▲ 2.9	▲ 11.3	5.9	▲ 6.2	▲ 42.4	21.6
	5月	▲ 3.2	1.0	▲ 7.5	▲ 5.3	▲ 2.0	9.1
24	6月	2.1	▲ 0.3	2.4	▲ 0.5	13.9	2.0

(出所) 内閣府「機械受注統計」

〇4-6月期のコア機械受注は前期比▲0.1%

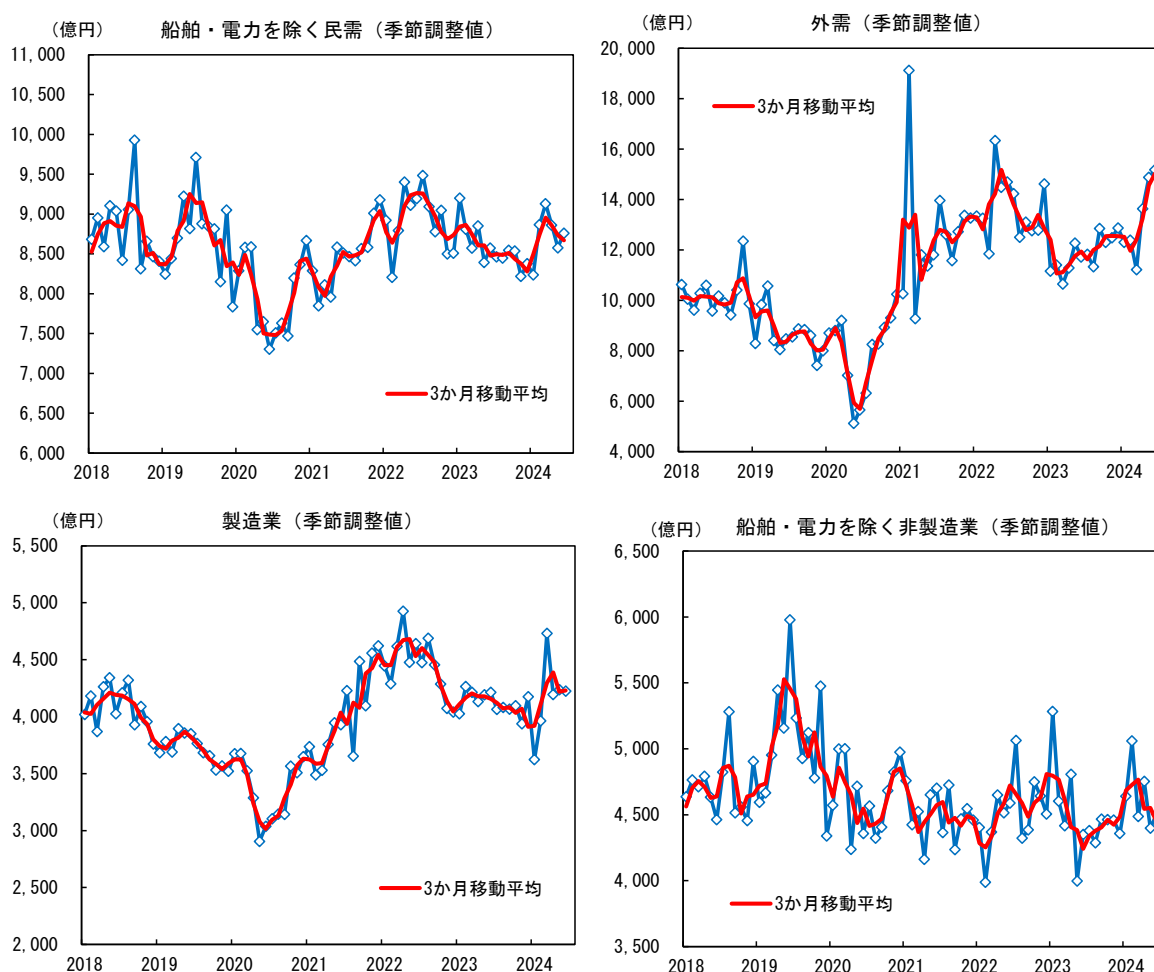
内閣府から発表された 24 年 6 月の機械受注（船舶・電力を除く民需、以下コア機械受注）は、前月比+2.1%と3か月ぶりの増加となった。事前の市場予想（同+1.5%）を上回る結果となった。ただし、これは4月、5月と減少してきた反動が6月に出たものと思われる。実際に、四半期で見た4-6月期のコア機械受注は、前期比▲0.1%の2四半期ぶりの減少となった。1-3月期の高い伸び（前期比+4.4%）の後としては、前期比で小幅減に留まったこと自体は悪くない結果であるものの、コア機械受注の持ち直しペースは鈍化している。また、同時に公表された7-9月期の見通しでは、コア機械受注は前期比+0.2%と横ばい圏内での推移が続く見通しとなっており、冴えない動きが続きそうだ。日銀短観等各種アンケート調査では、デジタル化・グリーン化対応や人手不足対応を背景に企業の強い投資意欲が示されているものの、国内消費の弱まりや海外需要減速による生産活動の下押しを受けて、計画対比で弱い動きが続いている。

もっとも、後述の通り業種別にみると製造業ははっきりと持ち直し基調にあることは好材料であり、7-9月期も見通しを上振れて着地する可能性はあるだろう。先行きの機械受注は緩慢なものの、増加傾向自体は維持すると見込む。

○業種別の動向

6月を業種別にみると、製造業が前月比▲0.3%、非製造業が同+2.4%となった。単月で増加したのは非製造業であるが、前月に同▲7.5%と減少していた後を踏まえると物足りない数値である。四半期でみると、4-6月期は製造業が前期比+2.8%と2四半期連続の増加となった。製造業については、1-3月期に落ち込んでいた自動車・同附属品（前期比+14.8%）が反発して高い伸びとなっただけでなく、世界的な半導体関連需要の回復を受けて電気機械（同+4.4%）が2四半期連続で増加するなど好調さがみられる。続く7-9月期の内閣府見通しも同+2.4%と高い伸びが見込まれており、はっきりと持ち直し基調にある。鉱工業生産や実質輸出などでは海外需要の減速を受けて足踏み感が出ていることから、今後製造業の増勢が鈍化する可能性は否定できないが、日銀短観等の各種設備投資計画を踏まえると増加傾向が途切れるとは考えにくい。

その一方で、非製造業は4-6月期に同▲3.7%と3四半期ぶりに減少に転じた。7-9月期の内閣府見通しでは同+1.1%と増加に転じる見込みだが、非製造業の減速感強い。先行きもインバウンド需要や国内サービス需要の一角によって、非製造業では景気に対して慎重な見方が続くことで、投資も手控えされやすい可能性も考えられる。国内消費がはっきりと上向くまでは、非製造業は一進一退が続くだろう。製造業が持ち直す中、非製造業では停滞感が続くこと、先行きのコア機械受注は緩慢な動きが続くとみる。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。